

# 霞

—2011年度冬季展示室だより—

土浦市立博物館

平成24年2月25日発行(通巻第18号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(2~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(18) 古写真 「土浦中学校第一回卒業生」



### 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(18)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び展覧会と催し物等】
- 將軍家拝領の御刀(近世)・・・2
- 土屋政直所用具足(近世)・・・3
- 花を詠む(近世)・・・4
- 江戸時代の日記にみる冬の行事(近世)・・・5
- 旧制土浦中学校の試業成績表(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「高校生に郷土の歴史を」・・・8
- コラム(18)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

明治35(1902)年3月に旧制土浦中学校を卒業した学生たちです。18歳から20歳の青年たちは学生帽をかぶりそれぞれにポーズをとっています。義務教育化以前の小学校で学び、家業や職業に従事してからの入学者も多い時代でした。5年間の学生生活を終え、誇らしげな面々です。【情報ライブラリー検索キーワード「土浦中学校」】

## 博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 「私の考古学五十年」と題し、考古学者としての歩みをお話しします。

3月18日(日)午後2時~(1時間30分程度) 会場:博物館視聴覚ホール

★★第33回企画展「土屋政直—土浦藩主の横顔」★★

会期 2012年3月17日(土)~5月6日(日)

本年は、享保7(1722)年11月に82歳でなくなった政直の没後290年にあたります。区切りの年に、土浦藩の基礎を築いた政直の姿に迫り、土浦藩の藩主を通して見えてくる近世初期の大名の姿を紹介します。

○見学会 土浦城ウォッチング—政直の足跡をたどる 3月25日(日)

午前9時30分~午後3時30分まで(博物館集合。荒天中止) 参加料:100円

定員:40名(先着順) 申込方法:3月9日(金)から電話または直接。

※土浦市教育委員会のバスを利用します。昼食は各自でご用意ください。

また、関連事業として記念講演会や企画展解説会等を予定しております。

詳細はホームページ等でご案内していきます。

○記念講演会 土屋政直とその時代 4月8日(日) 講師:吉岡孝さん(國學院大学准教授)

午後2時~3時30分まで 定員:70名 聴講無料 会場:博物館視聴覚ホール

★祝日開館します★ 3月20日(火)、4月29日(日)、5月3日(木)、4日(金)、5日(土)

★休館のお知らせ★ 毎週月曜日(但し4月30日を除く)・3月21日(水)、5月1日(火)

★無料開館のお知らせ★ 4月8日(日) 桜まつり協賛

★冬季展示は2月25日(土)~3月25日(日)までです★



博物館マスコット  
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

# 将軍家拝領の御刀 — 老中土屋政直の功績 —

## 刀「守家造」 (重要文化財)

土浦城東櫓には、将軍家からの拝領品や歴代藩主の遺品等（刀剣、茶道具、絵画、書）が納められていました。これらの道具類は、カビや虫害を防ぐため、夏の土用の頃に虫干しが行われていたようです。櫓から出された道具は、間違いのないように一点一点が書き留められました。その文書は現在「土浦藩士書留帳」と呼んでいるもので、これによると東櫓には6口の刀が納められていたことが分かりました。また、6口の内5口が将軍家からの拝領品であり、その伝来も記されていました。

### 〔土浦城東櫓に納められていた刀6口とその伝来〕

- 1 刀 銘「守家造」 代金百三十枚 (重要文化財)  
元禄7 (1694) 年4月10日、和田倉門邸 (土浦藩邸) に御成りになった5代将軍綱吉から政直が拝領。
- 2 刀 無銘 (則重) 代金三十枚  
元禄7年4月10日、和田倉門邸 (土浦藩邸) に御成りになった5代将軍綱吉から政直の次男定直が拝領。
- 3 刀 無銘 (左弘行) 代金二十枚 (重要美術品)  
元禄9年5月5日、4代将軍家綱の17回忌法事奉行を務めた働きにより、5代将軍綱吉から政直が拝領。
- 4 刀 無銘 (延寿) 代金二十枚  
宝永7 (1710) 年10月21日、5代将軍綱吉の3回忌法事奉行を務めた働きにより、6代将軍家宣から政直が拝領。
- 5 刀 無銘 (来国光) 代金二十五枚 (重要美術品)  
正徳元 (1711) 年11月21日、朝鮮来聘使諸事総管の働きにより、6代将軍家宣から政直が拝領。
- 6 太刀 銘「大原真守」 代金三百五十貫  
「江戸表よりご持参」とのみ記されている。

将軍家から拝領した5口の刀は、全て土屋家2代藩主政直の治世において受領したものでした。その内訳は、3口が5代将軍綱吉 (在職 1680~1709) から、2口が6代将軍家宣 (在職 1709~1712) から拝領したものです。政直は、貞享4 (1687) 年から享保3 (1718) 年にかけて30年余りもの長い間、幕府の要職である老中を務めていました。その功績もあって所領を4万5千石から9万5千石へと拡大させています。政直が老中在職中に将軍家から拝領したこれらの刀は、政直への厚い信任とその功績を物語っています。

(中澤達也)



刀「守家造」の拵 (部分)  
(当館所蔵)

刀は拵と合わせて下賜されました。拵には将軍家の家紋である三つ葉葵紋が見られます。

3/3 (土) 午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも展示室1に展示)

- 「土浦藩士書留帳」
- 刀 無銘 (左弘行) 重要美術品
- 刀 無銘 (来国光) 重要美術品



まさなお

# 土屋政直所用具足一質実剛健の気質一

てつこくしつぬりみついしもんぼとけにまいどうぐそく  
「鉄黒漆塗三石紋仏二枚胴具足」(市指定文化財)

具足とは各種の器具(兜、胴、佩楯、籠手、臙当、面頬など)を附随して構成し、整った装備のことをいいます。取り分け主要な胴(鎧)と兜を指して甲冑とも称し、その形式名称は、胴の製作様式によって名前が付けられています。

この資料は、胴に重ね目や継ぎ目が見えないように仕立てられた仏胴具足と呼ばれるものです。戦国時代に入ると攻城戦や集団戦への戦闘形態の変化や火縄銃による攻撃に対応するために、重装備で運動性に優れた当世具足が出現しました。仏胴は、この当世具足における胴甲形式のひとつです。

この具足は、江戸時代中期以降の装飾性のある甲冑とは違って、堅くて丈夫であるけれどシンプルな鉄の二枚胴となっています。唯一目立つのは、土屋家の家紋である三石紋を銀銅製の薄板にして、胴の前後に貼り付けていることです。もし、戦場でこれを着用したならば、銀色の三石紋が輝いて見え、その存在を大いにアピール出来たことでしょう。武家は特に軍役を本務としたことから、戦場で遠くからでも存在を明らかにすることに重要な意味があったのです。

土浦の郷土史家故寺嶋誠齋が書きとめた「土浦御武具帳」によると2代藩主政直が所用した甲冑は全部で4領あり、当具足は貳番の甲冑に符合します。胴の高紐(左肩)に木札が付けられており、表裏に「二」「徳」の文字が書かれています。「二」は貳番を、「徳」は政直の院号である徳相院の頭文字を指しています。

藩主の鎧としては飾り気のない実戦的な造りであることから、軍用として製作されたものと思われますが、政直の質実剛健な気質が表れているようにも見てとれます。(中澤達也)



「鉄黒漆塗三石紋仏二枚胴具足」(当館所蔵)

写真左：胴、 写真右：籠手

籠手には、土浦土屋家の裏紋である九曜紋が見られます。

3/24(土)午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近世コーナーに展示)

- 「鉄黒漆塗五枚胴具足」土屋定直所用
- 「土浦御武具帳」





桜の花がほころび始めると、今年はどこで花見をしようか、いつ行こうかと気持ちに弾みがつくのは誰しも経験したことがあるでしょう。

世の中に絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし (古今和歌集)

世の中に一切、桜というものがなかったら、春をのどかな気持ちで過ごせるのに、と詠んだ平安時代の歌人ありわらのなりひら在原業平には多くの人々が同感し、時代は移っても桜を愛でる日本人の心は変わっていません。

江戸時代、土浦の町人や農民たちも桜の時期には近隣の名所に出かけ、時には樹下で酒を飲んだり、笛を吹いたりして楽しんでいた様子がいろかわみなか色川三中の日記「家事志」に書かれています。三中は、天保5(1834)年2月、土浦藩士ぬいえもん藤井縫右衛門、町人さちえ川田幸枝、山口秀積ほつみら和歌を愛する友と真鍋台ひがんざくらへ彼岸桜を見に出かけています。3月には小松村(土浦市小松)や柿岡(石岡市)みねでらの峰寺へも出かけました。

いつかは散る桜ですが、和歌や漢詩などの文芸作品に詠まれ、永遠の命を与えられているものもあります。

宣布陽和是此花／此花謝

後役何花／天然佳麗無其匹／

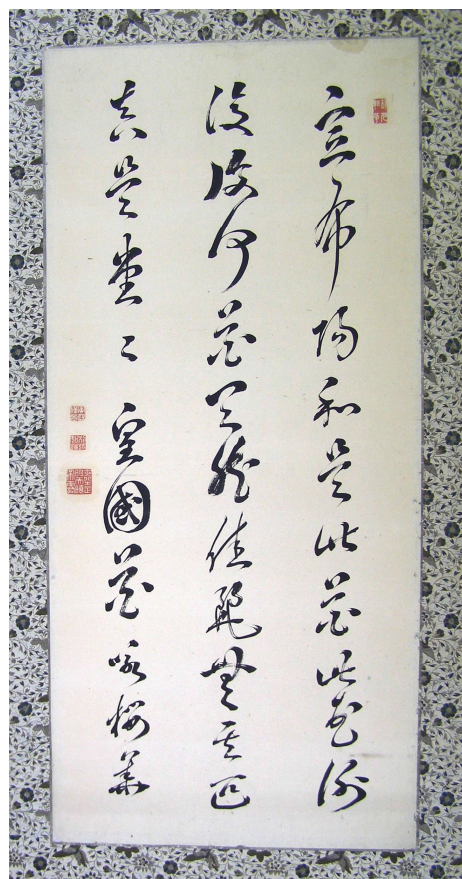
真是堂々皇国花／咏桜華

「桜華を詠ず」と題された七言絶句を訓読してみましょう。「陽和を宣布するは是れ此の花 此の花謝して後何の花か役めん 天然佳麗其れ匹なし 真に是れ堂々たる皇国の花」

春のおとずれをひろめるのは桜の花だ、この花が散ってしまったら何の花がその役をつとめられるだろうか、自然の造詣の麗しさはどの花にも勝る、これこそが日本を代表する花だ。

このように桜の堂々たる美しさを詠んだのは、じんりゅうじ神龍寺(土浦市文京町)の住職如蓮(1775~1858)です。如蓮は法名を大寅といい、詩文、和歌、書画ひいに秀で、一筆書きの龍は「火防の龍」として知られています。文政3(1820)年12月神龍寺の住職に就任しました。神龍寺は色川家の菩提寺であることもあり、三中を始めぬまじりぼくせん沼尻墨僊やさく佐久良あずまお東雄、ながしまやすのぶ長島尉信らと交流し、城下町土浦の文芸の中心的人物となっていました。

桜を詠んだ漢詩は菊、梅、松の美しさを詠った漢詩とともに二曲一そう双の屏風に仕立てられ、格調高く、かつ華やかな作品として伝わっています。(木塚久仁子)



如蓮筆 七言絶句屏風(部分)  
(当館所蔵)

|                                                                  |                                                                          |
|------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|
| <p>2/25(土) 午後2時から<br/>このページでご紹介した<br/>資料の展示解説会を開催<br/>いたします。</p> | <p>下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近世コーナー「城下町の文化」に展示)<br/>● 入江江民書<br/>● 長島尉信肖像</p> |
|------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|



# 江戸時代の日記にみる冬の行事

## — 事八日の伝承 —

文政9（1826）年12月8日、土浦城下の国学者色川三申が日記に記した一文です。

「今日こと初め、二月八日を事納めと前々より申伝ひ候而、籠をつるし候事いか成事にやあらん、在二而ハゑひす講ともいふなり」（12月8日は事初め、2月8日を事納めと昔から呼んで、籠を吊るすのだが、これはどういう意味があるのだろうか。農村では恵比寿講ともよんでいる）

12月8日と2月8日を「事八日」とよびます。事とは神事を意味し、両日は神々が移動する日と解釈されています。このため人々は神を迎えるための準備や儀礼をおこなったり、物忌みをしたりして一日を過ごしました。三申も言及しているように、土浦周辺では恵比寿（または大黒）を祀る日とされています。茨城県下における事八日に関する習俗を調べる調査が平成16年度に行われましたが、霞ヶ浦周辺の市町村ではこの日に恵比寿・大黒を祀る行事がみられました。以下、現在の民俗行事にふれながら、事八日の伝承をご紹介します。

市内において事八日に恵比須・大黒を祀る行為を記録した映像が、「富岡家の年中行事」（平成2年制作）に収録されています。土浦市白鳥町の富岡家では旧暦10月20日を「恵比寿さまの日」、新暦12月8日を「大黒さまの日」と呼びます。10月20日は恵比寿が稼ぎにでかける日、12月8日は稼ぎを終えた大黒をもてなす日と伝えられてきました。当主は家の軒先に籠を吊るした竹竿を立て掛けます。三申の日記にある「籠をつるし候」とはこの行為をさすようです。事八日に籠や箆を軒先などに吊るすことは日本各地にみられます。その謂れについて、一説では神々が家に帰ってくるための目印とも、神々のもたらす富を貯めるためとも言われます。神々とともに疫病神や妖怪（妖怪は神が零落した姿といわれます）がやってくるので、籠や箆には目がたくさんあるためこれで驚かせて、その侵入をふせぐという伝承もあります。

富岡家では恵比寿・大黒のために当主自らが風呂を沸し、風呂に入っただく所作をします。さらに尾頭付の魚などの料理をだして供え、一升ますにお金を入れてささげます。あたかも目の前に恵比寿・大黒がいてもてなすかのような所作をする点に特徴があります。

この他にも市内ではさまざまな行事がみられました。右叻では12月8日に山に入ることを控える風習がありました。この日の山には貧乏神が宿っているからだそうです。粟野町では旧暦2月8日を「おここの餅」とよび、神の使いと考えられる鳥に餅を供える風習がありました。この日に餅をつくことは矢作・手野・上高津などにみられ、子供の成長を祈願する意味合いが含まれていたようです。



籠を掲げる（12月8日）「富岡家の年中行事」より（製作：（有）茨城ビデオパック）

（萩谷良太）

3/10（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 富岡家日記（近世コーナーに展示）
- 「富岡家の年中行事」（情報ライブラリーにて公開）
- 「おここの餅」（情報ライブラリーにて公開）



# 旧制土浦中学校の試業成績表

—明治時代の学びの証—

進級・進学が季節が間近になってきました。以前『霞』10号「香澄小学校の卒業証書—明治時代の女子小学校—」の中で、義務教育でない時代の小学校の進級試験得点表についてご紹介しましたが、今回は旧制土浦中学校の試業成績表についてご紹介いたします。

土浦中学校は明治30(1897)年に茨城県の尋常中学校の分校として開校しました。土浦第一高等学校(土浦市真鍋4丁目)の校内に明治37年に建てられた荘厳なゴシック建築の校舎の一部が「土浦中学校旧本館」として国指定重要文化財となっていますが、開校当初は校舎がありませんでした。授業は新治郡役所(現亀城公園)の二階で開始され、小学校や民家も借用しながら継続し、最初の校舎(後の土浦高等女学校)は明治32年に土浦町の立田に完成しています。

写真の明治35年の試業成績表は、山口剛(文学者)や秋元梅峯(神龍寺住職)など土浦の著名人が5年生のときのものです。姓名が一覧になっており、15学科のそれぞれの点数、学科の合点(総合点)をもとにした成績点(平均点)、及第・落第の判定、出身地、年齢も印刷されています。卒業時の成績点が「89」で「及」(及第)の生徒が最初に、「落」(落第)の生徒2名・「欠」(欠席)の生徒1名が最後に記されていることから、成績順であることがわかります。及第の判定をうけた32名が、立田の校舎での第1回の卒業生となりました。

また、生徒の人数に注目すると、明治32年に66名だった2年生は、5年生になると約半分の35名に減っています。保立俊一さん(大正3年生、土浦中学校卒)によると、「父親は最初の入学生だったが、家業を継ぐには3年間で十分だという家の方針で、3年生で中途退学した。そういう学生は多かったようだ」とのことです。同32年の1年生134名は、2年時には118名、3年時には84名、4年時には70名、5年時には51名と減少しています。2年から3年への進級時には33名減っていますが、落第者13名・欠席者3名であるため、それ以外の理由での退学者が17名あったことがわかります。

現在確認している最も古い成績表は明治32年のもので、当時2年生であった生徒の御子孫の家に残り、氏名も記されていることから、成績表は各自に配布されたと思われます。学校に行くということもなかなか叶わない当時においては、こうした成績表は上位に掲載されれば名誉なものであり、そうでない場合は一念発起し勉学に励む原動力となっていたのかもしれない。

(野田礼子)

| 明治三十<br>五年三月<br>茨城縣立土浦中學校學年試業成績表 |     |
|----------------------------------|-----|
| 姓名                               | ... |
| 出身地                              | ... |
| 年齢                               | ... |
| 漢文                               | ... |
| 算術                               | ... |
| 理科                               | ... |
| 英語                               | ... |
| 音楽                               | ... |
| 体育                               | ... |
| 労働                               | ... |
| 合計                               | ... |
| 成績点                              | ... |
| 及第                               | ... |
| 落第                               | ... |
| 欠席                               | ... |
| 備考                               | ... |

茨城県立土浦中学校学年試業成績表(部分)  
(当館所蔵)

|                                                              |                                                                                                                            |
|--------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p><b>3/17(土)午後2時から</b><br/>このページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。</p> | <p>下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●香澄小学校の試験得点表</li> <li>●土浦中学校卒業証書</li> </ul> |
|--------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



# 市史編さんだより

## 〜〜御成日記―土屋家―大イベントの記録〜〜

御成<sup>おなり</sup>とは高貴な人が訪問したり臨席したりした場合に用いる言葉です。江戸時代には権力のトップに君臨した徳川将軍家の御成といえ、それはそれは大層なものだったようです。土浦藩土屋家の二代藩主政直は、江戸城の和田倉門の近くにあった藩邸へ、二度も将軍綱吉の御成を経験しています。元禄7（1694）年4月10日、老中になって7年目53歳の時と、その翌年元禄8年9月12日のことでした。その元禄7年の諸記録の一部が国立国文学研究資料館に収蔵されています。その中から経費に関する記録を少しご紹介しましょう。

第四巻（第一巻～第三巻は欠）には、御成のために家<sup>か</sup>中<sup>ちゆう</sup>の役付の人々への下され物が書かれています。最初の熨斗<sup>のしめ</sup>目小袖と麻袴のセット（武士の正装）の人数だけでも77人にのぼります。更に医師・儒者・絵師・小姓なども含めて藩士らしき人数が358人、加えて坊主30人、奥方や姫付きの女中<sup>ちゆうげん</sup>10人、中間・足輕等99人という500人ほどへの金品のリストです。

第五巻は当日の将軍以外の客の部屋割りと料理を出す場所、またそれぞれへのもてなしの役割りが整然と書かれています。老中から始まって、部屋で料理を出す人数が198人、勝手の間で225人、その他次の間や居屋敷まで、一括で人数もきちんと書かれていないものもあります。

第六巻下は（上巻は欠）御成が無事に済んだ後の祝いの振舞の書上げです。これは4月27・28日に能の会を催して料理の振舞がありました。御成の当日客として招いた人々の内でも、再度招いた人、無事役目を果たしてこの日の振舞にあずかった家中の面々、出入りの町人のお目見えなどの名が記されています。さらに6月28日にもその成功を祝って振舞がありました。この日には能楽の喜多十太夫がお囃子をつとめています。

第七巻には4月10日の客への料理とそれを盛る器の書上げがあります。御成の場所である和田倉門の御殿では上の料理348人前、中の料理133人前、居屋敷と呼ぶ常の住居に当たる座敷では、中の料理362人前、下の料理208人前が用意されました。

第八巻は上の巻が、その翌日に招いた人々へ届けた進物のリスト、下の巻が主に家中の者や臨時に雇った人々・出入りの町人・神社仏閣への初穂・能役者への褒美金などの書上げです。

第九巻は上下共に到来物のリストです。皿大小4,330枚・畳表5,903枚・蠟燭51,100挺などという膨大な数の届けものが書上げられています。下巻は御成前日の4月9日から12日までの、主に食品の届け物が書上げられ、生鯛だけでも505枚、干鯛が36箱と1,004枚という数です。

第十巻には当日に入用な諸道具が列記されています。膳の数だけでも950人前、また進物用の太刀117振など、紙数40丁に及ぶ書上げです。

第十一巻には以上の総経費の入用別が列記されています。将軍を迎えるための御殿の普請入用から始まって、献上品・来客への贈り物等・茶室の準備・呉服類・照明・料理等々細やかに項目分けされています。「都合金二万五千七百三十六両三分と銀四分一厘」で締めくくられています。

2万5千両といえば現代のどのくらいに当たるのか、簡単には換算できませんが、莫大な費用であることは確かです。それでも将軍綱吉との信頼関係、諸大名への宣伝効果は絶大なものがあつたであろうと推察されます。第一巻～第三巻には、おそらく将軍綱吉への接待の記録があつたと思われそうですが、残念ながらその部分は欠本になっています。

3月17日からこの御成日記十冊が、企画展で二回に分けて展示されます。是非土屋家が最も勢いのあつた元禄時代の華やぎの名残を御覧いただきたく、お待ちしています。

（土浦市立博物館 囑託 村松常子）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は昨年 10 月に博物館を見学して下さった茨城県立土浦第二高等学校の高橋賢司先生にご寄稿いただきました。

## 「高校生に郷土の歴史を」

平成 23 年 10 月 18・19 日と、茨城県立土浦第二高等学校 3 年生における「総合的な学習の時間」の一環で土浦市立博物館を訪れました。このような形でお世話になるのは前年度に引き続きではありましたが、私自身初めての訪問で、また震災後ということもあり、前年度とは少し内容を変更して行いました。

生徒達も半数は土浦市外からの通学者なので、初めての生徒が多かったようです。私も含め初めて土浦の歴史に触れ、城下町として、商人の町として、学問の町として、それぞれとても奥深く、他に誇れる町に暮らしているのだと実感しました。そして先人達が後世の我々に本当に多くの遺産を残してくれたおかげで今の土浦市があるのだと改めて認識することができました。生徒達も新たな発見や驚きがあったようで、特に、土屋家の偉大さや、土浦の水運などには興味津々の様子でした（貴重な国宝も拝見できました）。

それもさることながら、生徒達にとって最も有難かったことは、木塚さんをはじめ学芸員の方々が丁寧に説明して下さったことです。見るだけでは分からない様々な事情を話して下さり、見学の見所や展示品の意味を理解でき、とても有意義な体験をすることができたと感謝しております。

一方で、櫓門を見学した際、やはり震災の影響を目の当たりにしました。あのような建築物は人間の宝ですが、それが傷つくということに虚無感を感じました。と同時に、このような建築物や膨大な歴史資料を、大切に丁寧に管理し、展示して下さっている博物館の皆様には頭が下がる思いがいたしました。皆様のおかげで郷土に対する愛や誇りを一層強固にすることができたと、生徒・職員を代表してお礼申し上げます。そして来年度も現 2 年生にこの体験をさせてあげたいと強く思います。

(茨城県立土浦第二高等学校 教諭 高橋賢司)

### とどろこ コラム(18)ー水、滞らずー

博物館 2 階ベランダにも展示があることをごぞんじでしょうか。

土浦城の堀を臨むベランダに「土浦城櫓門の礎石」と「国分勤兵衛家の鬼瓦」があります。東西櫓は土浦城の貴重品や武具を収納する倉庫としても機能し、櫓門ともども亀城のシンボルでした。国分勤兵衛は伊勢国（三重県）出身の商人で屋号を大国屋といい、土浦で最初に醤油醸造を手がけたといわれています。醤油は霞ヶ浦から利根川、江戸川を經由し、水運で江戸に運ばれました。

この二つの資料を古瓦と桜川のさび砂利を用いて表現した水の流れの上に配置しました。なだらかに湾曲した線は古瓦で表現しています。

霞ヶ浦、桜川などの湖沼や河川は土浦地方に生きてきた人々の生活や文化、経済と大きくかかわってきました。特に水運はこの地域の来し方を知る上で欠かすことのできないものです。庭園展示はそうした地域の姿をシンボリックに表現したのです。

水の流れはとどまることを知りません。博物館の展示室でも絶えず展示替えをおこなっています。滞ることなく新しい資料と成果をお目にかけていきたい、そんな願いも込めています。

(木塚久仁子)

### 情報ライブラリー更新状況

【2012・2・25 現在の登録数】

古写真 482 点 (+5)  
絵葉書 389 点 (+5)

※ ( ) 内は 2011 年 10 月 1 日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1 ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

### 霞 (かすみ) 2011 年度 冬季展示室だより (通巻第 18 号)

編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央 1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6 ページのタイトルバック(背景)は、博物館 2 階庭園展示です。

2011 年度冬季展示は、2012 年 2 月 25 日 (土) ~ 3 月 25 日 (日) となります。「霞」2012 年度春季展示室だより (通巻第 19 号) は 4 月 1 日 (日) 発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。